

邊字考

萩 庭 勇

はじめに

標題を邊字考としたが、其の實は邊字中丙字下口字考とすべきである。が些か馴染まない嫌いがあるので單に邊字考とした。この字は多見する一字ではあるが日中の專家にその說解を見ない。勿論所謂邊字に同意であることは萬人が認識するところである。つまるところ統言すれば同意、散言すれば……と言った視點から試考する。拙者は邊字下部の口字はどんな意味で、どう發音するのか長考して今日に至った。その結論を得たのでここに管見を簡述することとする。

一、邊字について

標題の邊字の形貌、とりわけ丙字下の口字の何如を説明するためには、先ず邊字について型通りの說解が必須である。

この一字は、說文解字（以下「說文」という）卷二下に在え、先賢によれば

【字形】「彘に从ひ（意符）鼻の聲（音符）」形聲字である。「彘の意符」は、「𠂔」の略形で道路を行く意である。

【字音】「布賢切」（ヘン）である。「鼻」がこの音を表す。この音の表す意味は、「畔」（ハン）が田界の意であり、

（また）藩が屏の意であるところを以て見ると、垂崖（說文の解）の意、（つまり）邊境の意である。

【字義】 説文に言うとおり、「垂崖を行く」意である。がこの義は一般に行われず、ただ邊境の意のみ用いられた。

(加藤常賢・漢字の起原「邊」字下)

とあり、斯界の泰斗白川靜著「字通」に在っても大同小異である。がこれはあくまで「邊」字の説解であって、これは一つの起點には成るが、これのみに拘泥しては「邊」字、とりわけ丙字下の「口」字が何たるかは仍然不明である。その實説文には「邊」(篆文)字が在えるが、この字の丙字下「𠂔」をいくら凝視しても埒があかず、従って解決には連動しないのである。

二、自・丙・方字について

前述の「邊」字の不明、就中丙字下の口字の何たるかを解くに、その照準を邊字にのみ置いたのでは何時まで経っても解明の糸口は見えないのである。そこで視點を換えて参考にすべきは、邊字に先んずる契文・金文に在える以下の三字である。

第一字【𠂔】契文。

第二字【𠂔】金文。(邊字の偏旁)

第三字【𠂔】金文。(邊字の偏旁)

再び先賢の説解によれば三字は同義である。管見ではこの三字の關係こそ「邊」字の丙字下の「口」字の意を解く鉤があると思うのである。一目して

第一字は「自」と「丙」

第二字は「自」と「方」また「自」と「方」

第三字は「自」と「丙」と「方」とから成っている。

と、先賢の前掲三字下に於いて「丁山はこれらの字において、自（鼻）を聲符とみておる（説文闕義箋）が間違っている。」「自」即ち「鼻」は意符であって、「丙」「方」は聲符である。第三字においては「丙」と「方」が重複している。「自」に从ひ（意符）丙または方の聲」の形聲字である。

と説いている。が管見によれば、前述に在るように「自」字が現在の「鼻」字の原字であるとすれば、その音は「ビ」（或いは近似音）であり、「方」字に近似であって、或いは丁山の説解は當を得ているかも知れないのである。と言うのは單なる想像ではなく、「方」字は「卜」字に通ずからである。この二字はその形貌からすれば反轉の関係にある。その音聲からすれば轉音に外ならないのである。儻しこれが是認されるのであれば、「自」・「丙」・「方」三字は、「べ」「べ」「べ」と成るのである。半歩譲れば「べ」の近似音だったと思う。換言すれば「丙」字は「自」字の翻譯、「方」字は「丙」字の翻譯に外ならないのである。

三、丙字下「口」字について

前に「自」・「丙」・「方」字が翻譯の關係に在ると述べたが、これが是認されると「口」字もまたその延長線上に在るの思いに及んでならない。つまるところ「口」字は「方」字の翻譯に過ぎないのである。従ってその發音は「ハウ」と讀むも可、また「べ」と讀むも可である。

おわりに

結局のところこの二字は、前述の通り統言すれば同意、散言すれば先後關係に過ぎないのである。